
一晩だけの恋人

月原 智

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

一晩だけの恋人

【Nコード】

N2717B

【作者名】

月原 智

【あらすじ】

彼女にとっては、必然の出会い。でも、俺にとっては偶然の出会い。結末は、目が合ったそのときにすでに決まっていた……。それでも、俺は確かに彼女を愛してた。

第1話

僕の初恋は、「恋」と呼べるほど綺麗なものじゃなかった・・・。

彼女と出会ったのは、僕がまだ大人になりきれていない、微妙な年齢だった。

そのころの僕といえば、親に反抗しては家を飛び出して・・・。

そのまま学校へ通うなんてことは、しょっちゅうあった。

ある夜だった。

僕はいつものようにコンビニで晩飯を買おうと、弁当売り場を物色してた。

「ちょっと、お客さん？」

それは突然だった。

ビックリして振り返ると、店員と万引き犯が出口でもめていた。

僕も他の客達に混ざって、遠巻きに見ていた。

次の瞬間、僕は万引き犯にクギツケになった。

彼女が振り返りざまにみせた強い眼差しに惹かれた・・・。

「それ、僕が頼んだやつなんです……。僕が見当たらないので、外を覗こうとしたのかもしれませんが。すいません僕が払いますので。」

店員も彼女も言葉を挟まないように、僕はマシンガンのようにしゃべった。

店員は少々疑いをもったままの視線だったが、会計をすまさせてくれた。

外に出てみると、逃げたと思っていた彼女が僕を待っていた。

「バカだね……。」

彼女は僕をにらみつけたまま言った。

けれどその視線には、さっきのような強さが見られなかった。

むしろ、彼女の瞳は優しくなっていた。

「でも、ありがと……。」

思いがけない言葉に困惑した。

僕は買い物袋を彼女に渡して、その場を去ろうと考えた。

「これ、やるよ。」

突き出した袋を彼女は見つめる。

「いない。」

彼女の返答に戸惑った。

「なら、どうして・・・？」

「一人で食べてもおいしくないから・・・。いない。」

僕は何も言わずに彼女の手を引いて、「いつもの場所」に向かうことにした。

「いつもの場所」・・・。

それは、古いアパートだった。

今はそのアパートに住んでいる人間はいない。

まあ不法侵入にはなるが、しょっちゅうここで夜を過ごさせてもらっている。

—204号室—

2階にあるその部屋こそ、僕の居場所だった。

何回もきてるために、僕の私物も少々ある。

だれが払ってるのかは知らないが、なぜか水道とガスも使えた。

無断で使っても怒りに来ないということは、相当心の広い人だろう・
・。

なんて、勝手に思っては使っている。

「立派な犯罪者ね。」

家の説明を終えた直後に彼女は言った。

「よく言うよ……。万引きしたくせに。」

僕の言葉に彼女はいたずらっぽく笑った。

「それのお礼はするつもり。」

そう言うと、彼女は僕に軽いキスをした。

何が起こったのか訳がわからないまま、僕は立ち尽くしてしまった。

第2話

それは、一瞬の出来事だった・・・。

啞然とする俺と、笑う彼女。

俺は彼女から視線をそらした。

「初めて？」

いたずらに彼女が聞いた。

動けずにいる俺。

「そうなんだ。」

彼女のペースにどんだんのせられていく。

「茶でも入れてくる。」

俺はただたんに、その場を離れたかった。

立ち上がろうとした次の瞬間。

「行かないで・・・。」

背中全体に彼女を感じた。

時間が止まったように感じる。

彼女のぬくもりが、俺の体を包んでいく。

俺の鼓動はどんどん早くなっていく。

「離せよ…。」

言葉は裏腹だった。

彼女は何も言わなかった。

俺には我慢の限界が迫っていた。

「離れるよ。」

さっきより口調がキツくなった。

それでも彼女は何も言わない。

「どういつつもりだよ…。」

ため息まじりの3度めの警告。

離れない彼女。

「どうなっても知らないからな。」

そして、俺たちは自分たちの傷を舐めあつように重なっていった。

腕の中で眠る彼女を見つめて考える。

名前も知らないのに……。

自分の考えをめぐらせているうちに、窓の外から見える月の光が、優しく俺を眠りへと導いた。

次の日は、忘れようにも忘れられない日になった。

目覚ましがわりの着信音。

「はい。」

電話に出たのは俺ではなかった。

「だから、もう知らないって言ってるじゃん！」

だんだんとキツくなる彼女の口調。

ぼうつとしていた俺の頭も、次第に目覚めてくる。

聞きなれた電話の向こう側の声に、俺は心を握られた。

声の主は……。俺の兄貴だ……。

最終話

若干、覚めきらない頭で考える。

俺の兄貴は高卒後、すぐに結婚した。

けれど、最近夫婦関係がうまくいってないようで、しょっちゅうケンカしている。

声の主が兄貴だとすると、目の前の彼女は兄貴の奥さんということになる。

つまり、俺は義姉と寝てしまったことになる…。

でも、決ったわけじゃない。

そんなこと、あつてたまるか！

俺は、恐る恐るその名を口にした。

「・・・美春さん？」

俺の声に、彼女は話し途中のケータイを落とした…。

「なんで…。」

氷ったまま動かない彼女の瞳。

「なんでなんだよ！」

俺の言葉に、だんだん暗くなる彼女の表情。

そして彼女は言った。

「腹いせよ……。」

自分の過ちと衝撃の事実、目の前が暗くなるのがわかった。

「どうしても、最後に復讐がしたかったの……。」

動けなくなった俺に、彼女は最後のキスをした。

「ごめんね。それと、さよなら……。」

そして、彼女は部屋をあとにした……。

次の日の街は、慌ただしかった。

女のひとが電車にはねられたらしい……。

俺にはその人が誰なのかわかっていた。

『最後』

彼女は確かにそう言った。

悲しい確信……。

だからというわけでもないが、俺は新聞もワイドショーも見なかった。

まだ少しだけ部屋に残る彼女の香水の香り。

その香りだけが、俺が彼女を愛してたことを知っていた。

一晩だけの恋人…。

目があったときから、彼女からは逃れられない運命だったんだ…。

たとえば、裏切られたと知った今でも、俺は確かに彼女を愛してた。

一晩だけの恋人…。

—完—

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2717b/>

一晩だけの恋人

2010年12月14日16時50分発行